

子の遺跡を記録以下の諸編は個々の問題を捉へて考證を加へ、曾戸茂梨の地を案じ、三浦三港を考へ、李栗谷を評傳し、蔚山城の天險を探り、關羽崇拜の風俗を論じ、天道教待天教の緣由現狀を述ぶるなど實に興味深き讀物である。卷首に近衛公爵家製藏の朝鮮宣祖十三年春謁聖賜宴圖を入る、外、卷中處々に寫眞を挿入し、赫居世の墓、箕準城、金首露降誕地、大院君、伊藤公遭難の瞬間箕子陵等二十三葉あり、朝鮮史關係に此の種の書籍の尠なき折柄、實益と趣味とを兼ねたる好著を謂へる、少しく紹介遲延の嫌あれども良書なるを以て茲に登載することとした。(四六版五三〇頁東京富山房發行、價三、五〇)〔那波〕

● 綜合日本史概説上卷 栗田 元次著

本書は高等學校又は専門學校等の教科書として、はた中等教育者の參考用として編述したもので、上卷には開闢より豊臣時代までを收め、徳川以降を下卷に收める豫定になつて居る。編次の大體は、高等學校の教授要目に

準據して章を設け、政治・戰爭・法制・文化・思想の各方面に互りて説明を試み、一方に偏らないで全體としての國史を説く事に努力してある。されば本書は著者自身の新發見新見解を發表しようためのものでなく、先人の研究を取捨綜合して、國史の大系を組織せんとしたものであつて、著者の努力は頗る大であつたであらう。加ふるに挿入の圖版は、文書・日記・建築・彫刻・繪畫等の各方面に互つた十八葉の外に、所々に指圖を入れて説明を補うて居る事は、本書編述の目的に最も適した企てと言へよう。もし再版の節にでも、欄外の餘白をもう少し多くする事、簡單でもよいから地圖を挿入する事、もう少し考古學の方面の諸問題に觸れてほしい事、この兩三の希望が達せらるゝならば、吾人のみの欣びではあるまい。(菊版四六八頁、中文館書店發行、定價三、八〇)

● 鞍馬寺史 橋川 正著

洛の内外を問はず、時の古今を論ぜず、上下貴卑から非常な信仰を受け、御曹子九郎判官の物語中主要な一齣

をなし、更に轉じて天狗妖魔の本據地の如く現はれ、各種の方面に各様の感化を與へて居る松尾山金剛壽明院、即ち俗稱鞍馬寺は、本年丙寅の年を以て本尊開扉をなし伽藍の落慶供養を行つたが、その記念として出版されたのが本書である。第一章鞍馬寺の創立より、平安、鎌倉吉野、室町、安土桃山、江戸、明治の各時代に於ける鞍馬寺を通觀し、特に鞍馬の願人、地誌に見ゆる鞍馬寺及び年中行事の二章を設けて通史の足らざるを補ひ、最後に附載として鞍馬寺國寶目錄を收めた菊版二八六頁、加ふるに圖版五十を以てしたものである。前後十二章の中で特に吾人の注意を惹いた中の一二を舉げるに、本寺の創立を寶龜年間鑑禎の創立とする寺傳を排して延暦十五年造東寺長官藤原伊勢人の創創なりと斷じ、王城の北方に當りて國家鎮護の毘沙門天を本尊とせる所に本寺創立の意義を認めんとした事、平安朝時代の章で大治二年再建の時に作られた毘沙門天像が左手を眉間に翳して遙か遠方を凝視する姿勢をして居る事は、儀軌を外れたもので恐らく王城守護の精神を具象化したものであらうとした事

出土遺品の内に治承三年十月十五日の源親實在銘の經筒のある事によつて源家と本寺との關係を認めんとした事鎌倉時代の章では嘉祿三年二月大佛師定慶の墨書ある木造聖觀音立像を紹介せる事、正嘉二年在銘銅燈籠が僧俗四十四名の自署かと思はるゝ人名ある事の意義を、團體的意識の目醒めつゝあつた一表現とした事、吉野朝時代の章では曆應頃より現はるゝ良口率分に關する鞍馬・坂本商人の論争の事を注意して居るし、室町時代の章では善光寺大勸進所藏武田信玄の元龜三年（推定）閏正月廿二日の鞍馬寺宛の書狀に「寶前に於て虎卷之法勤行」の句あるを注意した事、鞍馬の願人の章で、これは俗法師であるを斷じた事等である。著者がこの著をなすに當りて、或は四國に、或は北越に信州に廣く行き互つて史料を探り、古文書は勿論金石銘文を始めとして、卷末の奥書の類から其時代々々の文學にまで互つて、苟くも史料となるものは殆んど之を充分に利用して以てこの一卷をなしたのであつて、其の周到なる用意と巧みなる結構とは、著者の苦心を察知するに充分である。もし望めるならば、

首尾にでも、本寺を中心とした地圖が一葉收めて欲しかつた。本寺と平安京との關係を知る必要のために。(鞍馬寺開扉事務局出版部發行)

● 史蹟精査報告 第一 内務省

大正十二年八月印行全く成り將に配布せんせざる時に當り大震災のために殆んどその全部を烏有に歸し、僅かに一冊を存せしを以て之を補正し、今回再版に附せられたもので、黑板博士の「上野三碑調査報告」、田澤金吾君の「山ノ上古墳」宮地博士の「日光並木街道附並木寄進碑」の三篇を併收し四六倍版本文五三頁圖版四十三挿圖二より成る。

「上野三碑調査報告」は即ち多胡、山ノ上、金井澤の三碑の研究である。多胡碑に就ては狩谷掖齋の誤讀の文字を指摘し、難解の文字「羊」及び「尊」を説明し羊は方向を示す「未」の假り字であり、「尊」は必ずしも書紀の用字例に均泥する必要なく、奈良朝時代より藤原時代にまでつゞいて用ゐられた文字で「みこし」訓むべきであるとし

て居り、山ノ上碑は天武九年説を採るべしと斷じ、掖齋は文義古拙讀むべからずとして居るけれども、これはテニヲハを省いた讀み下しの國文であるとして之を立派に讀み下し、放生寺の僧長利がその母の黒賣刀自のために記したものなりとし、金井澤碑亦殆んど同様の國文脈のもので信仰の紀念物として建立せられたものに外ならぬと言つて居る。「山ノ上古墳」は山ノ上碑の東傍四間にある古墳の精細な調査報告であるがその築造年代が天武帝時代と想定さるゝ事によつて山ノ上碑と關聯して長利僧の母馬賣刀自の墳塋ではないかと推定して居る。次に「日光並木街道並並木寄進碑」は日光街道に並木を植ゑる事は文明八年に四十三代の權別當となつた東園房昌源が既に實行したものであるが、現今のものは寛永の初年頃家康以來の近臣なる大河内正綱が二十有餘年の星霜を費して成就したのであるが、延長十里に垂んとする杉並木の寄進碑が正綱卒去の年慶安元年四月十七日附であつて、その六月廿二日に彼は七十三を一期として長逝したのである事を續説して居る。本報告書で最も欣ぶべき事はその

圖版である。先づ地圖上に位置を示し、遠望や實測圖を入れ、次で實物全部及その拓本を収め、更に必要な文字は殆んど實大と思はるゝ大きさの寫真と拓影とを併掲して以て研究者に實地に莅むが如き便宜を與へた事である。特に所要の文字一字のためにでも一枚の圖版を用ひた事は「精査」と言ふ名に耻ぢぬ近來の試みであると言へやう。〔以上中村〕

● 溫 故 雜 集

從來尾張國に於ける史料史蹟の探究踏査を行つた收獲の中極秀なるものを或は繪葉書に撮影し或は玻璃版に上せて發行し斯界に寄與する所が多かつた名古屋溫故會は今回又國寶弘法大師御入定勸決記、同七寺藏一切經、徳川侯爵家藏熱田社古圖、石河男爵家藏享元繪卷、情妙寺藏茶屋交趾貿易圖を四つ切大の玻璃版に附し溫故雜集と名づけて發行することとなり、去る五月卅一日に其の第二一切經を頒布した。此經は尾張權守大中臣安長が發願して當時の能筆に書寫せしめたもので、安元元年寫經の事

を始め治承二年に終了したものである。本揖は其内の般若經の唐櫃、同中蓋表面の釋迦十六善神、般若菩薩十六善神、裏面の識語、唐櫃内の小図、經卷表紙、⁴首、同裏面及び卷末を八枚の寫真とし之に解説を附してあつて、古文書、藝術の研究上少からず參考となるものである。〔名古屋溫故會發行、非賣品〕〔松野〕

● 二十史朔閏表 陳 垣 著

龔に元西域人華化考を著はして東洋史學の進運に寄與せられたる陳垣氏近頃の快著である。著者は北京大學にありて從來の支那史學の研究法の科學的ならざるを慨き恒に各種の研究を發表して必ず一隻眼あるを示して居る。夙に東西年紀の研究にも潛心して支那曆西洋曆回曆に關し考覈する所多しと聞く、本書は即ち其の一端を發表せるものにして、支那史朔閏の研究を目的とし西曆回曆を附載したものである。宋の劉義叟の長曆に倣ひて漢高祖元年より起筆し、耶律儼の遼宋朔閏考錢侗の四史朔閏考、汪氏の長術清の萬年書は勿論、支那に存在する